

医療費窓口負担等の免除措置継続に関する請願を不採択とすることに対する反対討論

平成 29 年熊本県議会 9 月議会 2017 年 10 月 3 日 日本共産党 山本伸裕

日本共産党の山本のびひろです。

知事提出議案第 42 号、および 43 号、専決処分の報告及び承認についてであります。これは育英資金の返還滞納者に対し、一括して延滞返還金及び延滞利息の金員を支払うことや訴訟費用は全額被告らの負担とする内容の判決、及び仮執行の宣言を求めて訴えを起こすことが提起されております。これまでも、私は繰り返し主張しておりますが、滞納者を裁判に訴えて返還を求める手法には反対であり、滞納に至った事情をよく汲み取り、当事者の支払い能力に見合った返還方法について県が親身に相談に乗りながら解決を図っていくことを改めて求めるものであります。

請第 27 号、熊本地震における医療費の窓口負担等の免除措置継続に関する請願であります。委員会の採決は不採択であります。これに反対し、採択とするよう議員各位に呼びかけるものであります。

今なお四万人を超える方々が避難生活を余儀なくされています。多くの避難者が、くる日もくる日も日々直面する生活の困難とたたかい、また将来への生活がどうなるのだろうと言う不安と向き合うなかで、心と体に大きなストレス、負担がかかっており、健康悪化が心配されております。熊本県民主医療機関連合会が行なった仮設住宅入居者アンケートのまとめによると、回答者 256 名中、実に 118 名、およそ 2 人に 1 人の割合で、被災前より体調が悪化したと回答されています。これからの心配事を複数回答で訪ねると、住居が心配と答えた方が一番多くて 45%、次いで健康の不安が 33%となっています。医療費の窓口負担の減免・免除については、アンケート回答者の 88%、220 名の方が継続してほしいと回答されています。

私自身も西原村の仮設住宅に入居しておられる方から切実な訴えをお聞きました。狭い慣れない仮設住宅暮らしで体調も優れず、また震災後仕事も少なくなり収入が減ったことから医療費の窓口負担免除が命綱となっている。もし免除が打ち切られてしまったら薬代も合わせると毎月一万円以上の負担となり、とても病院にかかれなくなる。生きていけなくなる。助けてほしいとの切実なお話しでありました。

応急仮設住宅避難者だけでなく、みなし住宅に避難しておられる方々の健康悪化も指摘されていま

す。益城町地域支えあいセンター、よかたいネットがまとめられた、みなし仮設の住民の健康状態についての資料を見ますと、転居による住環境の変化、コミュニティから離れたことによる孤立とストレス、失業廃業などによる影響、見通しのない生活再建の不安などにより健康悪化が広がっている具体的事例が紹介されています。

熊本地震の大きな特徴として、増え続ける震災関連死が挙げられています。その背後には死に至らないまでも、震災をきっかけにした病気発症や持病悪化などの震災関連疾患の広がりがあります。発災後の苛酷な避難環境に加え、その後の避難生活の孤立や不安、困窮が背景にあると指摘されています。熊本学園大学の高林秀明教授によると、こうした震災関連疾患の広がりの中で医療費窓口負担の免除軽減措置を打ち切るならば、住宅再建等の出費のうえにさらに医療費負担の新たな発生によって、経済的理由による受診抑制を生むことになる。医療費免除措置を打ち切ることは、心身の疾病・障害を治療・リハビリできないまま生活再建・復興に被災者を立ち向かわせることとなり、震災関連疾患をさらに悪化させる、そうなるとこれは復興災害だと指摘しておられます。

避難生活者がいまだ4万人を超える規模で存在している状況の中で、熊本県は医療費免除・減免措置を打ち切るべきではありません。もともとは仮設住宅への入居期間を二年と定めておきながら、それよりも短い期間で医療費免除を打ち切る国のやり方に大本の原因がありますので、国に対し免除の特別ルールを期間延長を強く求めるべきであります。その一方で、東日本大震災に見舞われた岩手県では、熊本の場合と同様に国から医療費免除の特別ルールを約一年半で打ち切られましたが、しかしその後も県知事が独自に支援することを決断し、発災から今日に至る実に6年半もの期間、今なお免除制度を継続していることと比較してもあまりにも熊本県の対応は冷たすぎるのではないのでしょうか。実施主体は市町村だから免除を継続するかどうかは市町村の判断だといって突き放す。こうした県の姿勢は、日ごろから被災された方一人ひとりの復興なくして復興はありえない、被災者の痛みの最小化を図ると常々おっしゃっている蒲島知事の発言とは間逆の姿勢であるということを強調するものであります。

以上の理由から、医療費の窓口負担等の免除措置継続を求める本請願は不採択ではなく採択されるべきであるということ呼びかけて討論を終わります。